元結詩小論

――「演興」四首と「系楽府」十二首について――

はじめに

天宝六載(七四七)、元結(七一九~七七二)は、玄宗の天宝六載(七四七)、元結(七一九~七七二)は、玄宗の天宝六載(七五二)に宰相の李林甫が亡くなり、翌天宝十二載、静の日々を過ごしていたとされる。そしてその後天宝十一間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習間、元結は主として商餘山中にあって、心の静寂を保つ習いたがのよりによる制料に応じて上京した。

元結自身は、この時期について、

(元子世に遊ぶに病み、商餘山中に帰る。) 元子病遊世、帰于商餘山中。 (心規)

と、世俗のうちにあって疲弊して商餘山に戻ったことを

言い、

加

藤

敏

・乃相与占山泉、闢榛莽、依山腹、近泉源、始為亭廡、

静し、適自して閑を保つ。) に近く、始めて亭廡を為り、始めて堂宇を作り、因りて習(乃ち相与に山泉を占し、榛莽を闢き、山腹に依り、泉源始作堂宇、因而習静、適自保閑。(述居)

と、商餘山中の地相のよい場所を選んで居を定め、精し、減罪して限を化し、

の生活を送ったことを述べている。また、「二風詩」

(是に於いて州里に帰る。後三歳、多病を以て商餘山に習・於是帰于州里、後三歳、以多病習静於商餘山。

静す。)

どからすると、彼がただ静養につとめていただけであったていること、また蘇源明に説楚賦三編を奉っていることなったことを言う。しかし、一方で元子と称して作品を残しのように、自らが病気がちであり、三年間商餘山中にあ

ていたため、仕えようとする気持ちがなかったと推測して現実的絶望。」と述べ、元結は権謀うずまく現実に絶望し一方面,這固然是全身遠害之道,但更重要的,却是出于対氏は、「在安史之乱以前,他已無意仕途,習静于商餘山。とは考えにくい。この時期の元結について、例えば孫昌武

価値観によって支えられていたとする説を呈示している。たのではあるまいか。」と、元結が独善兼済という儒教の隠逸の生活をすべきである』とする自己認識の方が強かっ

おり、また川北泰彦氏は「『汚濁の世にあっては、儒臣は

から政治のありかたへの認識を明確に持っていた彼が、活外の政治世界に対する絶望や、汚濁した世に生きざるを得ない知識人を支える儒教的価値観が元結にはあったであろうい、知識人を支える儒教的価値観が元結にはあったであろうの政治世界に対する絶望や、汚濁した世に生きざるを得なの政治世界に対する絶望や、汚濁した世に生きざるを得なの政治世界に対する絶望や、汚濁した世に生きざるを得なの政治でありかたへの認識を明確に持っていた彼が、活

づけられ、高い評価が与えられている作品である。また、「系楽府」十二首は後の新楽府の先蹤として位置

それによって生み出された表現の検討が必要とされるであ

の場を得られず、愚者として自らを位置づけたことと、

ろう。

躍

この作品が書かれたのは、序には「天宝辛未」とあるこの意味が検討されねばならない。 (大宝辛・明に「辛未」の年は無く、「天宝辛・明」、すなわが、天宝年間に「辛未」の年は無く、「天宝辛・卯」、すなわらしても、天宝六載以降、天宝十二載(七五三)に進士にいる。作品中に天宝六載らしても、天宝六載以降、天宝十二載(七五三)に進士においても、商餘山に習静していた時期に書かれたことの意味が検討されねばならない。

二首の表現について若干の考察を加えたものである。て、元結の自己表出のあり方を検討しつつ、「系楽府」十本稿は、この時期の作品のうち、「演興」四首に着目し

序において、の作品には、深い閉塞感が表出されている。彼は「自述」の作品には、深い閉塞感が表出されている。彼は「自述」天宝六載の制科に応じ、下第して商餘山にもどった元結

也。 則猗然。及三年、 者也。見則茫然。 天宝庚寅、元子初習静于商餘。 窮而然爾。 有惑而問曰、 或者不喻。遂為述時命以弁之。先曾為述 無幾、 人聞之参、参曰、 子其隱乎。 人聞之是、是曰、此学者也。 対曰、 人聞之非、 吾豈隠者邪。 此隠者也。見則崖 非曰、

居一篇。因刊而次之、総命曰自述。

り。窮して然るのみ、と。或る者喩らず。遂に為に時命を述し、非りて曰はく、此れ狂者なり。見れば則ち茫然たり、と。光として曰はと、幾くも無くして、人之を聞きて是とし、是として曰はと、幾くも無くして、人之を聞きて是とし、是として曰はと、幾くも無くして、人之を聞きて是とし、是として曰はと、光主庚寅、元子初めて商餘に習静す。人之を聞きて非と(天宝庚寅、元子初めて商餘に習静す。人之を聞きて非と

者、出口のない閉塞した状況の中に置かれている「愚者」と述べ、自らは隠者なのではなく、「窮」した結果の愚

之を次し、総べて命づけて自述と曰ふ。)

べて以て之を弁ず。先に曾て述居一篇を為る。因りて刊して

とを知らず、官吏たらんとしたことをさして「愚愚者」と胚胎されている世界において、自らが無用の存在であるこ

においては、一見泰平に見えるが、内には衰亡への兆しがであるとしている。さらに、「自述」三編のうちの「述時」

している。

先ず「演興」四首を取り上げることとする。されたのと時を同じくして書かれたものである。このうちされたのと時を同じくして書かれたものである。このうち「演興」四首や「系楽府」十二首は、こうした認識が示

「演興」は、序に

餘西乳之下。邑人修之以祈田。予因為招祠訟閔之文以演餘西乳之下。邑人修之以祈田。予因為招祠訟閔之文以演命餘山有太霊古祠。伝云、豢竜氏祠大帝所立。祠在少

興。

て以て演興す。)を修めて以て田を祈る。予因りて招・祠・訟・閔の文を為りりて立つる所なり、と。祠は少餘の西乳の下に在り。邑人之りて太霊の古祠有り。伝に云へらく、豢竜氏大帝を祠

中」の四編からなり、楚調独特の、激しくまた時に痛々し際に書かれたもので、「招太霊」「初祀」「訟木魅」「閔嶺とあるように、商餘山にある太霊の祠を村人が修復した

いまでの自己表出が全編をおおっている。「太霊」は「大

の言は尽なり。意を演べ物を尽くし、興を引き喩を極む。)」と之言演、極之言尽。演意尽物、引興極喩。(引の言は演、極帝」、すなわち天帝をいう。「演興」は、「引極」序に「引

開してゆくという意味と考えられる。

あることからすると、自らの思いを託し、

比興の表現を展

之声兮起飅飅、吹玄雲兮散而浮。望太霊兮儼而安、澹油兮端清、予願致夫精誠、久愵兮饶饶、招捃擂兮呼風。風木修修兮草鮮鮮。嗟魑魅兮淫厲、自古昔兮崇祭。禧太霊招太霊兮山之顚、山屹党兮水淪漣。祠之櫴兮眇何年、

端清なるを禧し、 は鮮鮮たり。 祠の獺るること眇として何れの年ならん、 太霊を山の顚に招けば、 **嵯魑魅は淫厲なるも、** 予夫の精誠を致さんことを願ふも、 古昔より崇祭す。 木は修修として草 太霊の

愵ひて慌慌たり、招き捃擂して風を呼ぶ。

雕たり、

玄雲を吹き散じて浮す。

太霊を望めば儼にして安ら

秈

与太霊兮千万年。

木孫を桷と為し木母を榱とし、

雲

(初祀)

風の声起ること飅

かなり、 首「招太霊」は、鋭くそびえる山の頂において太霊 澹として油溶都しくして清閑たり。)

り、 を招くという、上昇的で鋭角的なイメージとともに始 れてくれぬ憂いと、その降神の喜びとが、『楚辞』九歌 が太霊を招くにふさわしい地であることを言い、太霊が訪 あって、この地のみは太霊を祀ってきたのであると、ここ 草が鮮やかに覆っている。 太霊の祠は毀たれて久しいが、その地は木が美しく茂 魑魅が跋扈する世界の中に ま

n した元結の 雲中君に似た構造を持ちつつ、ほとばしるように吐露され 、の強い 商餘山習静期における元結の文学の特色となってい 冒頭の天に突き出した鋭角的なイメージからは、 求心的志向性をうかがうことができるが、 志向性は 「引極」三首他にも顕著に表れてお こう 太

る<u>5</u>

心的志向性を主要なモチーフとして展開されてゆく。 演興」四首は、 以後 「太霊」「魑魅」「精誠」、 そして求

殳 聯。 栭 山之乳兮葺太祠。木孫為桷兮木母榱、 霊巫潔兮舞顒于。 **仡渾洪兮馥闧闐、** 洞淵禅兮掲巍巍。 薦天鯚兮酒陽泉、 管化石兮洞刳天。 塗木蘭兮蒔糅蔫、 雲纓為帽兮愚木 献水芸兮飯霜 翹修釤兮掉蕪 被弱草兮禘

を翹げて蕪殳を掉ひ、霊巫謀り舞顕于す。天鮳を薦め陽泉を 酒とし、 て渾洪にして馥闐闐たり、 纓を楣と為し愚木を栭とし、 山の乳に太祠を葺す。 木蘭を塗し糅を蒔え、 水芸を献じ霜秈を飯とす。太霊と与に千万年なら 管は石を化し洞は天を刳く。 弱草を被ひて禘礿聯なる。 洞淵禅として掲として巍巍た を な し 修釤

鎌)や蕪殳が掲げられ、 た太霊に祈りが捧げられる。 あたりを覆い、祭祀が始まり、 太霊が降臨し安居すべき空間である祠が姿を現す。 れでゆく。 太霊を祀る祠の様と、そこで行われる祭祀の様子が描写さ 木孫や木母、 巫が舞い、 雲纓や愚木といった木々によって 楽器が奏でられ、 供物をそなえて降臨し 『楚辭』の世界を彷彿 釤 香草が

これは

太霊の降臨を喜ぶ第一首に続いて、「初祀」においては、

ん。

(47)

とさせる、精誠を尽くした祭祀の様子である。

「与太霊千万年」と同様の表現が見られるように、この二運を基づけ、斯において万年ならん。)」(唐大廟楽章)等にのであるが、「保天年、窮地紀。(天年を保ち、地紀を窮めのであるが、「保天年、窮地紀。(天年を保ち、地紀を窮めのがあるが、「保天年、窮地紀。(天年を保ち、地紀を窮めのであるが、「保天年、窮地紀。(天年を保ち、地紀を窮めのであるが、「招太霊」「初祀」は、迎神とそれに続く祭祀をうたうも

第三首の「訟木魅」は、一転して、悪木・善木・木魅・制作する者と同様の意識の存在を想定できるだろう。

ものである。こうした表現の背後には国家の郊廟の歌辞を

明。

郊祀あるいは大廟における祭祀の歌辞を連想させる

編は、

自らの心情を吐露してゆく。魍魎等のイメージに仮託しつつ、太霊に訴えるかのように魍魎

兮不如。瘱吾心以冥想、 豈元化之不均兮、非雨露之偏殊。諒理性之不等、 兮未堅、樟根桹兮可屈。 憐梫榕兮不豊茂。見榛梗之森梢、閔樅橎兮合蠹。 夫善悪之相紛。 大木使飛焰、徯枯腐之焼焚。実非吾心之不仁恵也、 意兮、願祓惡木之根。傾梟獍之古巣、取□童以為薪。 登高峰兮俯幽谷、心悴悴兮念群木。見樗栲兮相陰覆、 令橚橚以梴梴。 且欲畚三河之膏壤、裨済水之清漣。 樒体樽兮不香、拔丰茸兮已実。 終念此兮不怡。佁予莫識天地之 尚畏乎衆善之未茂兮、 、於順時 **楷**橈 為衆悪 豈恥 将封

> 馳。 香兮不滋。重嗟惋兮何補、每斉心以精意。 徳而来帰、 之所挑凌。 惑於霊心、 吾将出於南荒。 冀感通於天地。猶恐衆妖兮木魅、魍魎兮山精。 及陰陽兮不和、 経紿于言兮不聴。 輔神檉与堅香。 思聚義以為曹、 悪此土之失時。今神檉兮不茂、 求寿藤与蟠木、吾将出於東方。 令敷扶以相勝。 且憂顯之翩翩、 敢引佩以指水、誓吾心兮自 取方所以柯如 切援祝於神 又愁û之奔 使堅 祈有

ŋ ず、拔(尠)は丰茸として已に実る。豈に元化の均しからざ 堅からず、樟は桹根として屈すべけんや。 栲の相陰覆するを見、 壊を畚し、 を取りて以て薪と為さん。大木を割きて焰を飛ばしめ、 終に此を念ひて怡しまず。佁として予天地の意を識る莫き らんや、雨露の偏殊なるに非ず。諒に理性の等しからず、 たるを見、樅橎の合蠶せらるるを閔む。槢は橈橈として未だ の焼焚するを徯たん。実に吾が心の仁恵ならざるに非ざるな に順ふにおいて如かざらんや。吾が心を懲めて以て冥想し、 (高峰に登りて幽谷に俯し、 悪木の根を截たんことを願ふ。梟獍の古巣を傾け、 豈れ夫の善悪の相紛るるを恥づればなり。 済水の清漣を裨せんと欲せんとす。 侵榕の豊茂せざるを憐む。 心悴悴として群木を念ふ。 樒体は樽るも香ら 将に善木を封 且に三河の齊 榛梗の森梢 枯腐 口童 時 樗

て曹と為し、敷扶して以て相勝たしめんことを思ふ。 茂らずして、 灌し、 **楠橚として以て極極たらしめんとす。尚ほ衆善の未だ** 衆悪の挑凌する所と為るを畏る。 義を聚めて以 方所を

^{蟠木とを求め、吾将に東方に出でんとす。有徳に祈して来帰} 神檉と堅香とを輔とせん。 且つ顒の翩翩たるを憂ひ、 又

た獵の奔馳するを愁ふ。

陰陽の和せざるに及び、此の土の時

取るに柯如たるを以てし、吾将に南荒に出でんとす。寿藤と

を紿きて聴かざらしむるを。 恐る衆妖と木魅と、 せん。切に神明に援祝し、 を失ふを悪む。今神檉茂らず、 ねて嗟惋するも何をか補はん、 魍魎と山精と。上霊心を誤惑し、経て言 天地に感通せんことを冀ふ。 敢て佩を引きて以て水を指し、 堅香をして滋らざらしむ。 毎に心を斉へて以て意を精に 猶ほ 重

らず、悪木ばかりが繁茂する世界であった。これが商餘 に沈む自らが提示される。 高い峰に登り、 その目に映ずるのは、 俯して幽谷を見つめつつ憂い 善木が茂 Ш

吾が心自ら明らかにせんことを誓はん。)

位者随死、 「出規」に「有向与歓宴、 豈不裂封、 得金玉者皆孥、 疆土未識。 過之可弔。 豈無印綬、 参遊宴者或刑或免。(向に与に 有始賀拝侯、 懐之未暖。 其客得禄 已聞就 ことは言を俟たない。それは、

例えば同じ時期に書かれ

た る

中にあった元結が見た現実世界のメタファーとなってい

宴に参ずる者は或は刑せられ或は免かる。)」と述べられてい の客禄位を得る者は随ひて死し、金玉を得る者は皆孥たり、遊 だ識らず。豈に印綬無からんや、 しに、已に誅に就くを聞く有り。 歓宴せしに、之を過れば弔すべき有り。始め侯を拝するを賀せ 之を懐くも未だ暖まらず。其 豈に裂封せざらんや、 疆土未

表現には、高揚してゆく心がそのままに吐露されている。 せ、この世界を善なる世界に変えてゆこうとする思いを述 べる。火を放って悪木を焼き払いたいという、その激越な 元結は、この世界に対し、 悪木を除き、 善木を繁茂さ

る権謀うずまく世界を意味していよう。

枢にあって時権を弄ぶ者たちの姿を容易に想起させる。 のであった。それは、現実においては李林甫等、権力の中 在は、「上霊心を誤惑し、経て言を紿きて聴かざらしむ」、 が、ここにその「精誠」の疎通を阻む存在である「衆妖」 すなわち、その「精誠」が太霊に届くのを阻害してしまう 「木魅」「魍魎」「山精」の形象が呈示される。これらの存

再び心を高ぶらせ、 以て水を指し、吾が心自ら明らかにせんことを誓はん)」と、 精神が波打ちながらつねに上向きに鋭角的に高揚して 自らの「精誠」を闡明にしようとす

元結は、「敢引佩以指水、誓吾心兮自明(敢て佩を引きて

る。

(49)

元結はそうした自らの「精誠」が太霊に通じることを願う

この高揚した心は、第四首「閔嶺中」において再び下降行き、その高揚の頂点で編が締めくくられるのである。

してゆく。

如竜。 難。久懷懷以㥄惋、却遅迴而永歎。懼太霊兮不知' 当無路兮可入。彼猛毒兮曹聚、必憑託乎阻修。常儗儗兮 之玉峰。 登玉峰、 收樅穗兮梯険。躋予身之飄飄、承予歩之睒睒。入嶺中而 猛烈之材、獲与之而並駆。且春刺乎悪毒、又引射夫妖 為矢、絃母筱以為弧。化毒銅以為戟、刺棘竹以為殳。得 心為永惟。若不可乎遂已、吾終保夫直方。則必蒙皮篻以 閃閃而伺人、又如何兮不苦。欲仗仁兮託信、 伺人、又如何兮不愁。彼妖精兮変怪、必仮見於風雨。 眇不知夫所従。 □群山以延想、 尽群類兮使無、令善仁兮不害、然後採梫榕以駕深 独翳蔽於山顚、 殊閣絶之極顚、 極悶絶而求翠茸。将吾寿兮随所従、 寧古有而今無、 大淵蘊蘊兮、絶嶘岌岌。非梯梁以通険 吾独閔乎嶺中。 久低迴而慍瘀。 上聞産乎翠茸。 将与身而皆亡。豈言之而已 彼嶺中兮何有、 空仰訟於上玄、 欲採之以将寿 思未得兮馬 将径往兮不 有天含 以予

何か有る、天含の玉峰有り。殊に閟絶の極顕、上に翠茸を産(群山を□以て延く想ひ、吾独り嶺中に閔ふ。彼の嶺中に

に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の道方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 が心を以て永惟と為さん。若し遂げ已むべからずんば、吾終 で苦しからざらん。仁に仗り信に託せんと欲し、将に径ちに で苦しからざらん。仁に仗り信に託せんと欲し、将に径ちに で苦しからざらん。仁に仗り信に託せんと欲し、将に径ちに で苦しからざらん。仁に仗り信に託せんと欲し、将に径ちに で大の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て 惨惋 し、却って遅迴して永歎す。大淵蘊蘊として、絶棧岌岌たり。梯 で大の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を下していて矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を変りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を蒙りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を変りて以て矢と為し、 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を変しているできない。 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を変しているできない。 に夫の直方を保たん。則ち必ず皮質を変しているできない。 に夫の直方を保たん。則ちがするをでしているできない。 に夫の直方を保たん。則ちがしているでは、 に夫の直方を保たん。

て、 母筱を絃として以て弧と為さん。毒銅を化して以て戟と為 独り山頭に翳蔽せられ、 る所に随はんとするも、 **穗を收めて険に梯せん。予が身を躋らすこと之れ飄飄とし** て害せざらしめん。然る後梫榕を採りて以て深きに駕し、 夫の妖怪を射んとす。群類を尽くして無からしめ、 与にして並び駆くるを獲ん。且に悪毒を春刺し、又た引きて 予が歩を承ること之れ談談たり。嶺中に入りて玉峰に登 悶絶を極めて翠茸を求めん。 棘竹を刺として以て殳と為さん。猛烈の材を得て、 久しく低迴して慍瘀す。空しく仰ぎ 思ひは未だ馬の竜のごときを得ず。 吾が寿を将くせんとして従 善仁をし 之と

之を言ふのみならんや。) 今に無からんや、 て上玄に訟ふれば、 将に身と与にして皆亡びんとすとも、 彼の至精は必ず応へん。寧ぞ古に有りて 豈に

ちは群れ集まり、 故に、それは不可能なのであった。「猛毒」や「妖精」た ことであるが、「猛毒」と「妖精」とが人を窺っているが 姿である。玉峯の絶頂にいたる唯一の手段は階梯をかける のはるかな距離を思いつつ、商餘山中で憂いに沈む元結の 冒頭に呈示されるのは、「翠茸」が産する玉峯の絶頂と 玉峯の絶頂に至ろうとする者を、 またゆらゆらと動きながら人間の隙をうかがってお あるいは風雨とともにその姿を現し、 必ずや妨げそして葬 狐

表れてい 状況にある自らの姿を認識せざるを得ないのである。 は忽ち覚め、山の頂に置かれている現実が立ち現れ、 して玉峯をめざして上昇することを夢想するが、その夢想 「自述」序に示されていた「窮」の認識がここには明白に 元結はまたも「直方」を貫き、 彼らを滅ぼし、 彼らを排 先の 閉塞

ってしまうのである

0) 述べて結ばれる。 詩は、自らの精誠が必ずや太霊に通じるであろうことを 演興」の表現の特色である。その詩題が示すように、 激しい感情の鋭角的な高揚と頓挫とがこ

> 頓挫の繰り返しが、彼の煩悶の深さを物語ってい かったのである。「演興」に表出されている感情の高揚と 可能なのであり、煩悶のうちに商餘山中に在らざるを得な 争を繰り広げている世界においては、 心的な志向性を抱いていたが、李林甫・楊国忠らが権力闘 った元結は、この太霊に仮託された唐王朝に対する強 メタファーであることが前提とされている。 ここに展開される世界は、 そのまま元結の置かれた現実の 彼の精誠の貫通は不 商餘山中 -にあ 求

=

あった時期に作られたものとすると、この作品はどのよう 書かれたのとほぼ同時期の作であると思われる。 に解釈されるのであろうか。 先に述べたように、「系楽府」十二首は「演興」 商餘山 四首が

系楽府」十二首の序は、

引其義以名之、総命曰系楽府。古人詠歌不尽其情声者, 於上、下化於下。故元子系之。 化金石以尽之。其歓怨甚邪。 天宝辛未中、元子将前世嘗可称歎者、為詩十二篇、 戲尽歓怨之声者、 可以上感

二篇を為り、為に其の義を引きて以て之に名づけ、総て命づ (天宝辛未中、元子前世の嘗て称歎すべき者を将て、 詩十

怨の声を尽くす者は、以て上は上を感ぜしめ、下は下を化す 金石に化して以て之を尽くす。 けて系楽府と曰ふ。古人詠歌して其の情声を尽くさざれば、 其の歓怨は甚しきかな。 戲歓

べし。故に元子之を系す。)

も位置づけられているのである。 されており、またそれ故に、後の新楽府の先駆的な作品と 謡が諷諭と教化という社会的な機能を持つという認識。 と述べる。「系楽府」とは楽府を継ぐという意味である 確かにここには「上感於上、下化於下」、すなわち歌 が示

三年(七三五)の于燕の事件によるものであろうが、この たものであることを言うとともに、「演興」四首を想起す 表出への執着は、この十二首の表現が自らの歓怨を尽くし 怨の声を尽くす」という表現である。歓怨という、性情の 序において特徴的なのは、「其の歓怨は甚だしきかな」「歓 おそらく直接には元徳秀からの影響、具体的には開元二十 こうした楽府という形式による表現が選択されたのは、 商餘山中にある元結の不安定な精神の状況をも語っ

多く元結自身の表象である。 いる。またすでに指摘されているように、 「系楽府」十二首には作者の視点や主張が明確に表れて 登場する人物は

> とができず、あたかも旅人のごとき「羇愁」を抱きつつ去 はこの世界に「正方」が受け入れられる場所を見いだすこ

って行かざるを得ない。その姿はそのまま元結自身の姿に

ているようである。

和気天下流 南風発天和 和気 南風 天下に流る 天和を発

不能変羇愁 羇愁を変ずる能はず

能使万物栄

能く万物をして栄えしむるに

為愁亦何爾 自請説此由 自ら請ふ 愁ひを為す 此の由を説かんことを 亦た何ぞ爾る

苟邪皆共求 荷邪 皆共に求むればなり 諂競実多路

諂競

実に路多くして

江海有滄洲 正方終莫可 指以為深羞 嘗聞古君子 正方 江海に滄洲有り 指して以て深く差づと為すと 嘗て聞く 終に可なる莫くんば 古の君子は

戎夷、慈恵及於草木。(天下太平、礼楽は戎夷を化し、慈恵 胎され、衰亡への道を歩み始めているのである。「賤士」 かし、実は王朝はその内にすでに「諂競」と「苟邪」が胚 は草木に及ぶ。)」と述べられている唐王朝の姿である。 が託されている。それは「述時」に「天下太平、礼楽化於 詩の冒頭には、 穏やかに治まった泰平の世界のイメージ

(52)

(賤士吟)

重なってゆく。

また 「古遺嘆」、

所歎何所為 古昔有遺歎 古昔 歎く所は何の為す所 遺歎有り

有国遺賢臣 有国 賢臣を遺つれば

万世為冤悲 万世 為に冤悲す

所遺非遺望 遺つる所は望を遺つるに非ず

所遺非可遺

遺つる所は遺つべきに非ざらんや

所遺非遺用 遺つる所は用を遺つるに非ず

所遺在遺之 遺つる所は之を遺つるに在り

嗟嗟山海客 嗟嗟 山海の客

心非膏濡類 全独竟何辞 独りを全くするに竟に何をか辞せん 心膏濡の類に非ざれば

は 安得無不遺 容易に 野無遺賢 安くんぞ遺てられざる無きを得んや (野に遺賢無し)」という李林 甫

影であり、 憤懣を読みとることができるだろう。 件を踏まえたものである。「山海客」は元結自身の姿の投 の上奏を想起させるように、 この屈折した表現の背後には彼の押さえ切れぬ 明らかに天宝六載の制科の一

れら二首をはじめとして、「系楽府」十二首のうちに

は

元結自身の意識が明確に表出され、

彼自身の投影とし

ての形象が見られる。

作品として評価が高い 首はどうなのであろうか。ここにはそれぞれ、 む庶民の妻、流民、そして農民の姿が描かれている。この では、 十二首のうち、 「貧婦詞」「去郷悲」「農臣怨」の三 元結の規諫の意識が表れた諷諭

貧窮に苦し

うち「農臣怨」、

農臣何所怨

農臣何の怨む所ぞ

乃欲干人主 乃ち人主に干めんと欲す

不識天地心 天地の心を識らず

将論草木患 徒然怨風雨 将に草木の患を論ぜんとし 徒然として風雨を怨む

巡迴宮闕傍 欲説昆虫苦 宮闕の傍らを巡迴するも 昆虫の苦を説かんと欲す

其意無由吐 朝哭都市 其の意 一朝 都の市に哭し 吐くに由無し

謡頌若採之 淚尽帰田畝 謡頌 涙尽きて田畝に帰る 若し之を採らば

には、 此言当可取 草木の患や昆虫の苦を人主に訴えようとする農民 此の言 当に取るべし

術を見いだすことができず、都の市で慟哭し郷里に帰って が登場する。この農民は宮殿の傍らを彷徨し、 結局訴える

目したい。「貧婦詞」にも「誰知苦貧夫、家有愁怨妻。請し、ここではむしろ人主に訴える術を持たぬ者の形象に注ない為政者に対する強い批判を鮮明に伝えている。しか行く。その悲惨なイメージは、確かに民衆の苦しみを顧み

君聴其詞、能不為酸悽。所憐抱中児、不如山下麑。空念庭

や。憐む所の抱中の児は、山下の麑に如かず。空しく念ふ庭前るを。請ふ君其の詞を聴かんことを、能く為に酸懐せざらん主、長跪向之啼。(誰か知らん貧に苦しむ夫、家に愁怨の妻有前地、化為人吏蹊。出門望山沢、回頭心復迷。何時見府前地

に父母の郷を棄てんや。)」と訴える姿が描かれている。彼い老人たちが、「無患苦、豈棄父母郷。(患苦無くんば、豈おいては、悲歌しつつ故郷を捨てて去って行く身よりのながひて啼かん。)」と、府主に対して訴える術を持たない、の地、化して人吏の蹊と為るを。門を出でて山沢を望み、頭をの地、化して人吏の蹊と為るを。門を出でて山沢を望み、頭を

「系楽府」の表現が、彼らの訴えを受け入れる体制を持す。)」と、ただ傷み悲しむのみであった。 為悽傷。(之を念ふも何ぞ説くべけんや、独り立ちて為に悽傷 てゆくのである。

元結はこれに対して「念之何可説、

独立

たと言うことができよう。

らはその思いを人主に訴える術を持たぬまま、

流民と化し

深い閉塞感に苛まれているという表現の構造を考えると、的志向を吐露しており、彼の精誠はつねに阻害され、よりる。しかしこの頃の元結が閉塞状況の内にあって強い求心たぬ王朝に対する諷諭として機能していることは確かであ

けられるとともに、実はそこに自らの姿を見ているのである元結自身に重ねられる。元結の視線はこれらの人々に向

かれた農臣・貧婦・流民の形象は、そのまま商餘山中にあ

系楽府」十二首中の「農臣怨」「貧婦詞」「去郷悲」に描

る。

出 諷を第一とすることから始まっており、例えば天宝六 怨」の表出が強調されていた。元結の詩に対する意識は規 いるが、 がんと欲す。)」と、自らの詩作の営みを明確に位置づけ 古人規諷之流。(吾帝王理乱の道を極め、 (七四七)の「二風詩論」では、「吾欲極帝王理乱之道、 「系楽府」十二首は、その序にあるごとく、 とりわけ歓怨の表出ということにも意識が注がれて 商餘山に習静していた時期においては自己の表 古人規諷の流れを系 自らの 「歓 系 載 7

おわりに

本稿で検討したように、商餘山にあった元結の作品に

こうした表出の構造を考えると、「系楽府」十二首は、 ではなく、この時期の元結の閉塞感や煩悶が込められてい は、 に諷諭の意識によって書かれたものとして解釈されるだけ への情動、そして激しい求心的志向性の表出が見られる。 「演興」四首をはじめとして、深い閉塞感とその超克 単

る作品として読むことができよう。

君主に届けられるものであった。自らの精誠は、歓怨を尽 煩悶のうちに求められた自己表出の手段であり、 いると言えよう。商餘山中にあった元結にとって、楽府は ていた「太霊」への思いと等しい求心的な志向性が表れて 幸福な邂逅の場なのである。ここには「演興」に表出され くした表現として楽府に託されることによって、 とあるように、元結によれば、楽府は採詩の官が採取して また、「農臣怨」に「謡頌若採之(謡頌若し之を採らば)」 君主はそれを嘉納する。楽府はいわば元結と君主との 君主に届 また可能

- (3)游国恩他主編『中国文学史』(人民文学出版社 一九八二
- (4) 拙稿「元結の自述三編について」(『千葉大学教育学部紀要 「愚者」「愚愚者」の意味について検討した。 第五〇巻 Ⅱ 人文・社会科学編』二〇〇二)において、この
- (5) 拙稿「元結の初期詩編について」(『大久保隆郎教授退官紀
- (6) 同注(5) 念論集 漢意とは何か』二〇〇一)
- (7) 聶文郁『元結詩解』(陝西人民出版社 (8) 喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文学史』(人民文学出版社 一九 一九八四) など。
- 九五)など。

(千葉大学)

注

性でもあったのである。

- (1)孫昌武「読元結文札記」(『社会科学戦線』一九八五・三)
- (2) 川北泰彦「元結に於ける文学的軌跡」(『目加田誠博士古稀 記念中国文学論集」一九七四